

新刊紹介

シンジルト著『オイラトの民族誌：内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ』

広川 佐保

「オイラト」の名称を耳にしたとき、何を想起するだろうか。評者には、岡田英弘氏による名著『康熙帝の手紙』（中公新書、1979年）に登場する、オイラト系ジュンガル部のガルダンがまず頭に浮かぶ。そこでは、冷静沈着に戦略を練る康熙帝と対比されるように、勇猛果敢に戦うガルダンの姿が描かれる。なお、宮脇淳子氏によれば、「オイラト」という部族名称がはじめて歴史に登場したのは13世紀初めのことだという。オイラトはモンゴルと対立しつつ、四部族連合を形成してゆく。その後17世紀にジュンガル部長となったガルダンは、さらに勢力を拡大し、大軍を率いてハルハ部に攻め込むが、清朝に滅ぼされる¹。これ以降、それ以外のオイラト系の人々は、トルキスタン、チベット高原、中央アジアや東ヨーロッパなどユーラシア草原にひろく散らばり、そこで牧畜（遊牧）を生業としてきた²。現在、オイラトは中国やモンゴル国では「モンゴル族」の一下位集団として位置づけられ、またロシアのカムイク共和国やアルタイ共和国では基幹民族となっている。そのなかでも本書が光を当てるのは、中国領内に暮らすオイラト系の人々である。彼らはおもに新疆ウイグル自治区、および内モンゴル自治区、そして青海省に暮らし、民族籍はモンゴル族やチベット族に登録されている。著者のシンジルト氏は、オイラトを「異なる国家や民族そして宗教的な境界を横断しながら、さまざまな他者と共に暮らしてきた」人々と位置付けている（9頁）。

本書は、全9章280頁からなる大著であり、その構成は以下のとおりである。

- 第1章 めぐりあい：オイラトから人類学へ
- 第2章 命をいただく：三つの屠畜方法
- 第3章 命をはなつ：セテルという実践
- 第4章 幸運を求める：セテル実践の拡がり
- 第5章 万物を横断するヤン：牧畜民の自然観の現在
- 第6章 不幸を語る：土地と物を越えた存在であるオボー

1 宮脇淳子『最後の遊牧帝国：ジュンガル部の興亡』（講談社選書メチエ、1995年）、同『モンゴルの歴史：遊牧民の誕生からモンゴル国まで〔増補新版〕』（刀水書房、2018年）参照。

2 オイラト系の歴史的系譜、および現況については、ボルジギン・ブレンサイン編、赤坂恒明編集協力『内モンゴルを知るための60章』（明石書店、2015年）所収「中国領モンゴル人の世界」に詳述されている。

第7章 喧嘩をする：牧畜民集団の生成史

第8章 不和を避ける：もうひとつの共生

第9章 民族を横断する親族：牧畜民の集団観の現在

つぎに各章の概要について紹介したい。第1章において著者は、本書においてこれまでの人類学におけるふたつの方法論、すなわち人獣関係にまつわるエコロジー（生態学）という領域と、人人関係を巡るエスニシティという領域を統合することを課題とする。前者は、牧畜民を取り巻く自然環境全般を含み、後者は牧畜民の集団観に関わる問題である。また、後者は、現代社会における異なる集団の「共生」について、「周辺化」されてきた牧畜民のあり方から考えることである。このようにユーラシア大陸に暮らすオイラトの歴史や現状、そして人類学の理論を踏まえたうえで、牧畜社会における「集団観」研究を、いかに復活させ、継承させていくかが、本書のねらいである。

第2章では、オイラトによる家畜を「屠る」行為が主題となる。ここでは17世紀にホシヨド部族（オイラト系）のダルジャ・ボシヨクトが、黄河南部のトゥメド部族に提供された仔羊の「おいしさ」に魅了され、そこへ部族ごと移住した伝承から歴史を説き起こす。なお、チングス・ハンの「大ジャサ」という慣習法には、屠畜方法に関する規定があるものの、その後の慣習法には見られないという。以上を踏まえて、著者は、三つの地域に暮らすオイラトの屠畜方法に着目する。まず、①内モンゴル西部のオイラトは、いわゆるモンゴル式屠畜方法（腹割き法）を採用している。これに対して、②新疆ウイグル自治区のオイラトは、ムスリムと似た方法（放血法）を採るが、ムスリムとは血の扱いが異なり、腸詰などに加工する。さらに、③チベット高原のオイラトは、17世紀のグーシ・ハン王朝に由来するが、周囲のチベット人と同じ方式（窒息法）を採る。彼らはそれぞれ自分たちの屠畜方法が家畜にとって優しく、また屠られた肉も美味しいと確信している。本書では、これら三つの屠畜方法には、オイラトの集団的な規範は見られず、むしろ周囲に合わせた方法が採用されており、それは彼らが周囲の人々との「共生」を意識したためと結論付ける。

第3章から第5章までは、新疆ウイグル自治区やアムド・チベット（河南蒙旗）における「セテル（チベット語では、ツェタル）」実践が主題となる。セテルは、チベット語のツェタルに由来するとされ、「命 *tse*」を「解放する *thar*」ことを意味する。小澤重男編『現代モンゴル語辞典』（大学書林、1983年）によれば、セテルは、「首に着ける護身符」もしくは「呪符」を指し、セテルを施す行為は「精霊に捧げる家畜にリボンをつける」ことである。ユーラシアの牧畜民には、自ら所有するオス家畜や樹木にセテルを施す場合があり、多くの場合、僧侶がセテル儀礼を担当する。一般的に、セテル儀礼を受けた家畜を屠ることや売ること、毛を刈ることや騎馬することは許されない。しかし現実として牧畜民は、自分の所有する家畜を屠りながら、セテル家畜を所有している。このような相反する行為が牧畜民のあいだでどのように両立しているのかが、本書前半の論点となるだろう。

この問題を明らかにするために第3章では、新疆ウイグル自治区イリ・カザフ自治州のジョウソ、テケス、ニラカの三県に暮らすオイラトに着目する。彼らは、ジュンガル帝国の末裔であり、ワールドを自他称するが、現在の民族籍はモンゴル族である。これらワールドの人々は、約3万の人口を擁するものの、近年カザフやウイグル、漢人に囲まれて少数者となり、農耕化が進みつつあるという。ワールドは周囲から古い伝統を保持しているとみられるが、彼ら自身は民族区域の「自治権」を持たないため、伝統を失ったと考えている。

本章では、これらワールドのセテル実践に着目するが、その対象は家畜のみならず樹木も含まれる。近年では老衰したセテル家畜を屠る場合もあるが、これは現在の社会情勢に左右されたと考えられる。彼らがなぜセテルを行うかという、ケシゲ (*kesig*: 万物の中にある絶対的幸福) が低下したさい、その不幸から解放されることを願い、先々の幸福を求めためであるという。ワールドによるセテル実践の解釈は日々変化しつつあるものの、基本的にはセテルの対象の生きざまを見守ることであり、それがケシゲを獲得し、幸福追求につながるのである。

第4章では、イリ・カザフ自治州の三つの地域のオイラトによる、セテル実践について検討する。三つの地域のオイラトとは、①イリ・カザフ自治州アルタイ地区内のアルタイ地市ハンドガトゥ・モンゴル族郷のウリヤンハイ人、ブルジン県のホムカナス＝モンゴル族郷のトゥバ人であり、現在の民族籍はモンゴル族である。②タルバガタイ地区ドルブルジン県のワールド人(民族籍はモンゴル族)と、塔城市周辺の牧場に暮らすモンゴル＝キルギス人(民族籍はキルギス族)である。③タルバガタイ地区ホボクサイル＝モンゴル自治県のトルゴート人で、民族籍はモンゴル族である。これらの人々は共通して、牧畜を生業とし、チベット仏教を信仰しつつ、泉や土地を祭る慣習を持っている。たとえば、③の自治県では、家畜以外の動物や植物のみならず泉もセテルの対象となる。ここでも「ケシゲ」を追求するための実践としてセテルが行われているという。また近年、チベット仏教寺院の再興が進み、セテルも無形文化財の一つとなっている。一方、①と②の地区には僧侶が不在であり、かつ農耕化が進み、セテルは弱体化しつつある。しかしここでオイラトは幸福を招き入れるために、各家庭で仏教的な「キーモリ」(経文や仏像を描いた布製の旗)を掲げ、「オボー祀り」を行っている。以上について、本書はセテルのような実践が拡張されたものと解釈し、幸福を追求するための行為とみなす。つまりセテル実践の対象は、生物に限定されないのである。著者によると、従来の研究者の分析的枠組みでは、人間同士の関係が、人間と動物や自然との関係に投影されていると考えられてきた。しかし地域差はあるものの、オイラトにとって幸福は、人間社会内部だけで達成できるものではないと認識される。つまりオイラト牧畜民は、万物にケシゲがあるという認識に基づき、セテル実践を行っているのである。

第5章では、アムド・チベット牧畜地域(河南蒙旗)における「ツェタル」実践をもとに、人間と動物に関する既存の人類学的理解を批判し、人と家畜個体の関係を考察することを課題とする。本書によれば、社会人類学では、「個」を疎外して、人間と動物の関係を理解し

たが、生態人類学は、牧畜民が家畜を「個体」として認識することに着目してきたという。牧畜民がなぜ「個体」にこだわるのか、著者は牧畜民と家畜が対面する場が鍵であると仮定する。本章で取り上げる河南蒙旗の人々は、チベット化したオイラトであるが、彼らは家畜に一定の儀礼を施したあと、その耳や首にナヴツォル（五色のリボン）をつけ、これをツェタル家畜とする。河南蒙旗はチベット仏教の影響が強く、それゆえ屠らず、売らない「ツェタル家畜」が多く存在する。人々は暮らしの喜怒哀楽のなかでツェタル実践を行い、対象とする家畜を個体として認識するが、ツェタル家畜が死を迎えても感情移入することはない。さらにここではポッペヤハイシヒの研究を参照しつつ、ツェタルが、中央アジアやユーラシアで見られるシャマニズムと、仏教信仰との融合の産物である可能性にも言及する。また、河南蒙旗の牧畜民は、特定の家畜に「ヤン」（幸運、吉祥）を見出し、ツェタルを行う場合があるという。この「ヤン」は「チベット農耕社会」に広く見出され、種を超えて万物のなかに遍在すると考えられている。つまりツェタル実践を支えるのは「ヤン」観念であり、それはセテル実践におけるケシゲ観念と互換性があるという。以上の3章から、著者は、オイラトの人々が、生物か否かという「境界」にとらわれず、セテル実践を行い、また屠畜方法を周囲の民族に合わせるなど、民族としての集団的境界を越えていく様相を指摘する。

第6章から9章は、近代国家の成立とともに、オイラト牧畜民が周辺化されてゆく過程で、彼らが周囲の社会環境や異なる集団をいかに認識してきたかについて検討している。

第6章では、第3章で取り上げたワールドの「不幸を語ること」に着目する。新疆ウイグル自治区には、モンゴル族主体の民族自治地域として、ホボクザイル・モンゴル自治県、バヤンゴル・モンゴル自治州、ボルトラ・モンゴル自治州がある。これに対して、先に取り上げたイリ・カザフ自治州ジョウソ、テケス、ニカラの三県に暮らすワールドはネイティブの住民でありながら、そこで（モンゴル族としての）「自治権」を持っておらず、それを人口比率が低いためであると理解している。その歴史的過程を見てみると、ニカラ県におけるワールドの居住地域には、1930年代にカザフが移住して多数派となり、人民共和国成立後は漢人が急増し、農業化が進んだ背景がある。さらに本書では、ジョウソ県のワールドが、自分たちの暮らす土地に対して複雑な態度を示すと述べる。彼らは清朝がジュンガルを平定した記念碑について、先祖（ジュンガル）を否定するものと考えて忌避する傾向がある。その一方で、彼らは、国境付近の要所の地名がすべてワールド由来であることに誇りを持っている。しかし近年、当地では地下資源開発によって、ジュンガル帝国以来継承してきたオボーが破壊されてしまったという。彼らは自分たちが多数派であり、「自治権」があれば、オボーを保護できたのではないかと自責の念にさいなまれている。彼らはその要因を、1940年代の疫病の流行と、それによる人口激減に関連させて説明するが、本書ではこれを「不幸の語り」と位置付ける。しかし、これは彼らの幸運へのこだわりの強さを示すものでもあると本章では説明される。

第7章では、イリ・カザフ自治州タルバガタイ地区に暮らす、モンゴル＝キルギス族に焦

点をあてる。キルギス族は、新疆ウイグル自治区に人口の8割が暮らすほか、同自治区イリ地区やタルバガタイ地区、および黒竜江省富裕県でも生活している。自治州やイリ地区のキルギス人はイスラム教を信仰するが、タルバガタイ地区と富裕県のキルギス人は仏教やシャマニズムを信仰する。1980年に刊行された中国の社会調査記録は、清代の伝承に依拠して、タルバガタイ地区では仏教徒であるモンゴル民族が、ムスリムであるキルギス民族を支配し、彼らの独立を奪ったと記しているという。

このような歴史的解釈を検証するために、本章では、タルバガタイ地区塔城市周辺とドルブルジン県に暮らすカルムク＝キルギスに注目する。彼らの人口をあわせて2,300人足らずであるが、ドルブルジン県には5,000人のウールド人が暮らしている。清がジューンガルを滅ぼしたのち、キルギスは清によってウールド人組織の「ウールド・モンゴル・十ソムン」に編入され、ウールドと「共生」するようになる。「十ソムン」の人々は毎年夏、共同でドルブルジン県のオボー祭を行う慣習をもっている。「十ソムン」のうち第1～8ソムンの住民がウールドであり、第9ソムンはチャハル（清代に内モンゴルから移住）、第10ソムンがキルギスである。一般的にウールドとチャハルは「モンゴル族」の下位集団とみなされているが、キルギス＝モンゴルの出自は曖昧であり、またムスリムでもない。彼らが「キルギス族」になった理由は不明であるが、仏教を信仰し、使用するカザフ語には大量のモンゴル語が含まれているという。つまりモンゴル＝キルギスの「キルギス」は公定の民族範疇というよりも「十ソムン」の文脈では部族名称のひとつである。彼らはキルギス族とモンゴル族、そして仏教信仰とムスリム信仰のあいだで揺れ動きつつ暮らしてきた。近年の中国では、激しい民族対立に注目が集まりがちであるが、以上のような柔軟な民族を巡る概念や集団観を分析することも重要であると述べられる。

第8章では、内モンゴル自治区西部のアラシャ地域において、モンゴル人と漢人移民とのあいだで結ばれる「乾親」という擬制親族関係から、民族の「共生」を考察する。本書によると、現在、アラシャ盟では人口の7割以上を漢人が占め、モンゴル人人口は2割未満にとどまっている。なお、アラシャのモンゴル族には、主流派であるオイラト以外に、イスラムを信仰するモンゴル・ホトンや、漢人移民が定着してモンゴル化した人々も含まれる。アラシャの漢人移民の多くは甘粛省と寧夏出身であるが、モンゴル語やモンゴル文化を知らない漢人は「民人（イルゲン）」と呼ばれている。

さて、「乾親」とは、子供の丈夫な成長を願って、異性の男女に擬制的に預け、そこで命名を受けることであり、これはオイラトの慣習ではなく、広く漢人社会にみられるものである。乾親儀礼が結ばれる理由は多様であるが、アラシャでは、漢人が「擬制子」を積極的に実践し、異民族であるモンゴルの「呪力」の獲得を期待する。同書は「乾親」行為が、異なる民族間の境界を消失させるのではなく、互いを「他者化」するものと指摘する。一方、アラシャのオイラトは、どのように乾親制度を解釈してきただろうか。同書によるとオイラトの人々は、相手の要求を拒絶することは「ケシゲ」の低下につながるものと考え、「譲歩」

を選択するという。オイラトにとって、人の依頼を断ることは「エブグイ」（敵対的、不愉快な）行為であり、回避すべきと考えられる。アラシヤのオイラトにおいて、こうした観念を共有するものは「モンゴル」であり、共有できないものは「イルゲン」とみなされるが、必ずしも「イルゲン」は排除の対象となるわけではない。従来、乾親は民族の「共生」をもたらすものと解釈されてきたが、「共生」を支えるのは、オイラトの「寛容さ」であり、それを支えるのが「ケシゲ」観念なのである。

第9章では、第7、8章を踏まえ、河南蒙旗における「親族」と「民族」が課題となる。河南蒙旗やその周辺に暮らす人々は、オイラト部族連合をルーツとするが、チベット系の人々に囲まれて暮らすうちにチベット化し、ほとんどがチベット族の民族籍を持っている。2000年代以降、西部大開発が始まると、河南蒙旗周辺でも定住化政策が推進され、社会環境が大きく変化した。2010年代より、河南蒙旗を含むアムド地域の牧畜民のあいだでは、「親族」の集まりである「ニエディ」が広く見られるようになった。ニエディにさいして人々は一族の発祥の地などに集い親睦を深めるが、その数は数百人にのぼることもあるという。また彼らは、しばしばニエディの過程を記録するために、DVD作成や図書編纂を行うほか、SNS（微信）にチャットグループを開設し、親族共同体を構築する。ニエディの起源は諸説あるが、重要な点は、ここでの「親族」が血縁や姻戚関係に基づくものではなく、共通の「始祖」に求められることである。「始祖」は近年の人物である場合も多く、モンゴル系（オイラト）に限らず、チベット系の出自を持つケースも多くみられる。ニエディを通じて「民族は親族に包含され、親族は民族の境界を横断していく」現象がここでは見られるという。また著者は、エヴァンズ＝プリチャード著『ヌアー族』における「親族」との共通性を指摘し、牧畜民をめぐる研究の可能性を示す。そのうえで本書の内容を振り返り、牧畜民という「他者」を理解するためには、人間と家畜との関係を捉えなおす必要があると総括する。

以上が本書の概略である。評者は文化人類学については門外漢であるため、的外れな解釈があることをお許しいただきたい。オイラトがどのような民族であるのかに関心を持ち、本書を手にとった読者も多いと思われるが、良い意味でその予想は裏切られただろう。評者が注目するのは、オイラト系牧畜民が、中央アジアのさまざまな民族の間で暮らすなかで培ってきた独自性が、中国のいわば「周辺部」にも息づいているという、本書で言う所の「民族誌」である。著者は、オイラトのささやかな日々の実践から、家畜と人の関係を問い直し、彼らが築いてきた「共生」の在り方を考えることに力点をおく。本書の試みは、社会人類学や生態人類学、歴史学など多くの研究分野のあいだの交流や架橋へとつながるに違いない。

本書を一読して、評者なりに本書の持つ意義について、以下にまとめることにしたい。

まず、本書の前半では、「屠畜」と「セテル」の両立から、オイラトの自然観を表出させることを試みている。ユーラシア草原の暮らしのなかで、牧民にとって家畜たちは共に暮らす仲間でありながら、食生活では彼らの肉や乳製品に大きく依存している。これらがどのように両立しているのか、著者は「セテル」という行為に着目する。本書によって明らかにさ

れたことは、牧畜民にとって家畜が遊牧の暮らしを彩る存在であり、幸運を追求するための媒介者である点である。また、民族集団や国境を越えて、遠く離れて暮らすオイラト系の人々のあいだに共通して「セテル」のような行為が見られる点が興味深く、ここにユーラシアの牧畜民をつなぐ輪が浮かび上がる。一方で、本書でも触れられているとおり、今後さらなる社会の変化の中で「セテル」、および「セテル」のような行為がどのように変化していくのか、あるいは持続可能であるのかは、注視すべき課題であろう。

つぎに、本書で示されたオイラトと「民族」のありかたについてである。オイラトの外側にいる我々からすれば、牧畜民の生活が農業化や資源開発により圧迫され、「伝統的」な民族性が失われつつあるように見えるかもしれない。しかし、本書は、オイラトが、中国の政治的な分類と判断に基づく、公定の民族の範疇には当てはまらない存在であると指摘する。オイラトがモンゴル民族か否か、あるいはオイラト独自の文化の源流とはなにか、という問題はもはやここでは重要ではない。オイラトにおける民族の枠組みは、時によって変化するものであり、「ニエディ」のように現状に合わせて柔軟に、新しい「親族」を構築してゆく。こうしたオイラトの柔軟さは、彼らのたどった離合集散の歴史から形作られ、それが現在も進行している。こうした牧畜民の柔軟な「民族観」を支えるものが、移動や牧畜という生業であるとすれば、今後も継続する定住化や開発という試練のなかで、それらはどのように展開していくだろうか。今後の著者の研究に大いに期待したい。

三点目は、オイラトと「他者」との関係である。本書で論じられる、オイラトの「他者」のとらえかたは、評者の関心とも大いに共通点を持つ。評者は、モンゴルの土地に漢人農民が入植し定着していく歴史的な過程に関心を持っている。彼らは定住を禁じられたが、商人や労働者として単身でモンゴルに赴き、時には農耕に従事した。20世紀前後の旗の文書には、旗の管理した土地台帳や契約文書が含まれているが、そこで漢人農民は、たんにイルゲン（民人）、またはアラド（同）とされるか、氏名、年齢などが記されるにすぎない。これらの文書に通底しているのは、モンゴル人の「他者」に対する「無関心」である。しかし見方を変えれば、こうした「無関心」によって、ハルハのモンゴル人は、文化の異なる漢人を受け入れ、互いに干渉することのない「共生」を成り立たせていたとも考えられる。以上は、歴史文書に見られるモンゴル人と「他者」との関係であるが、これは本書が提示するオイラトの漢人に対する「譲歩」とも共通しているようにも感じられる。

17～18世紀にユーラシア草原を席捲したオイラトは、その後、各地に散らばって、牧畜生活を送りながら、ささやかな日々の実践を積み重ねてきた。それらは少しずつ形を変えながら各地で継承されている。本書は、そうした彼らの日常生活の取り組みを手掛かりに、牧畜民たちの紡いできた、壮大な歴史と世界観を描き出しているのである。

書誌：シンジルト『オイラトの民族誌：内陸アジア牧畜社会におけるエコロジーとエスニシティ』（明石書店、2021年）、280頁。